創刊90年
発行所　日刊建設工業新聞社
〒105－0021　東京都港区東新橋２－２－10
電話03（3433）7151　https://www.decn.co.jp/
©日刊建設工業新聞社 2018
記事　電話03－3433－7161　mail-ed@decn.co.jp
購読　電話03－3433－7152　mail-sa@decn.co.jp
広告　電話03－3433－7154　eigyo@decn.co.jp

日刊 建設工業新聞
THE DAILY ENGINEERING & CONSTRUCTION NEWS
2018年（平成30年）9月19日 水曜日
第19510号

明治維新150年と治水の歴史

竹林征三

〈28〉大塚切レ100年　柴田部長決潰追懐談

1917（大正6）年10月1日午前10時、淀川右岸大塚（高槻市）が決壊した。その時、陣頭指揮をとった大阪府内務部の柴田善三郎氏（後の大阪府知事）の追懐談は後世に伝えるべき内容が多い。そのうちいくつかの話題を抜粋して紹介する。

「現地では堤防の上は被災民で埋め尽くされていた。にぎり飯も2日以上食べていない。水がない。まず水と食料を供給しろ、一切府庁に指揮を仰ぐことは不要。まず、非常時に事を決断し指令するトップが足りない。被災地の三つの郡の郡長に権限を与えるから全責任をもってやってくれと命じた。

物品調達などは、書類は一切不要、1錢のものを1錢5厘でも早く調達しろ！間違いが生じたら全て私が責任を取る。ただ真っ直ぐな気持ちでやってくれ！次に切れ所の締め切り設計を急ぐ。その間に切れ所から水は2日に至り24キロ走って下流の神崎川の堤防を切り、西成郡まで浸水した。下流のたまった水をどうするか。堤防を切る以外にないと判断したが、どこを切るか技師に聞けば、知恵を貸すことができない。命令して技師を道連れに稗島堤防に行けば、村民が府庁のやることは遅いとして既に堤防を切ってしまった。これは大刑事事件だ。告発しなければなどの意見が出た。態（わざ）と切（きり）の私の決断を郡長に伝えてあったので地元民は私の気持ちを忖度（そんたく）して適当に取り扱った事にして事なしとした。

10月1日大塚切れ後すぐに締め切り工法の検討を技師に命じた。4日に締め切り工事は積算したところ6万7800円であったが、請負側に見積もらしたところ5万8400円だという。

6万7800円で請負せろと言ったら、いろいろ内部からクレームが出た。そうならその差額は火事場の緊急事業で大変だから、関わった人に報奨金としてご褒美で与えろ！

締め切り工事には3万5千束の粗朶（そだ）と千坪の石材が必要だ。3日以内に調達しろ、一万束の粗朶を調達するめどはついたが、2万5千束はこれから山へ入って伐採しなければならない。運ぶ船の手配を一切忘れていた。

淀川にケイ船してある船を全部あつめてこい。祝日だし夜中でもある。恐らく船には鎖か縄でかけられているであろう。誰の所有船でもかまわない。鎖、縄を切って一艘につき10円だけ金を傍らに置いておけ、大阪府がしばらく拝借したと書いてすぐにもって来い。

1坪の石は10トンある。1千坪の石とは10トンの貨車を30づつ連ねて1列車に致し、それが30回運ぶ量である。

大阪市の電車工事に使う石材を下流六里から逆航して枚方まで大至急もって来い。大塚の工事はその後、締め切り工事中に11日と24日、2度にわたり洪水が来た。最初は270間の長さがあったが、24日に最後の締め切りの日を迎えた。当初10尺の水深が、最後は切れ所が狭められ深ぼれし5間の杭が浮き上がりだした。最後の決断会議を開いた。最高の技術主任がこの工事はここで遺憾ながら成功の見込みがない。もう一度補強工事をし直して仕切り直しをする以外にない。第2席の技師が2週間も補強に時間をかけるわけにはいかない。このままで進める以外にない。自信はないが。その最後の締め切りに掛からんとするとき2度目の大出水にあい、締め切り工事のできた上を越水して大阪府技師による第1回目の工事は全部流れ去って失敗に終わった。その渦中に富山の奥に越中三叉という急流を締め切る工法があるという。

早速電報を打って金に糸目はつけず川倉人足を頼んで手配したなど、いろいろ紆余（うよ）曲折があって第2回目の締め切り工事は内務省勅任により10月28日から始まって11月7日にようやく締め切り工事は完成した。破堤から1カ月以上かかった」。

〈参考文献・『物語日本の治水史』鹿島出版会〉

（富士常葉大学名誉教授、風土工学デザイン研究所会長）

＝週1回掲載